

イネカメムシ、発生生態と防除対策についてわかったこと

病害虫防除対策担当 酒井和彦

近年、埼玉県内で発生量と被害が増加しているイネカメムシについて、的確な防除対策を明らかにするため、2024年度からの2年間、県内各地での発生生態調査を行いました。その結果、次のようなことが明らかになりました。

【越冬場所】

成虫は温度が下がり過ぎず、適度な湿度が保てる場所を選好します。具体的には、南あるいは南西側に開けていて日中に陽当たりが良く陽だまりになる場所（生垣や植え込みの下、フェンスや塀などの構造物の脇、林縁）に堆積した落ち葉の下や、ジャノヒゲ（園芸名リュウノヒゲ）の株内です。また、ススキやオギ等の株元、樹木の根元に堆積した落ち葉の下でも越冬成虫が確認されます（写真1～3）。

【本田での発生消長】

従来、イネの出穂とともに水田に飛来するとされていましたが、早期・早植栽培水田では、出穂期より前に水田に飛来していることが明らかになり（図1）、早い所では6月下旬から水田内で成虫が確認されました。普通期栽培では8月下旬から9月中旬にかけて発生量が増加することが明らかとなりました（図2）。また、2024年の調査では、出穂時期の異なる水田が隣接している地域において、餌資源として好適な若い稲穂を求めて水田を移動することが明らかとなりました（データ略）。



写真1 サツキ植え込みに堆積した落ち葉の下



写真2 ジャノヒゲ株内



写真3 オギの株元

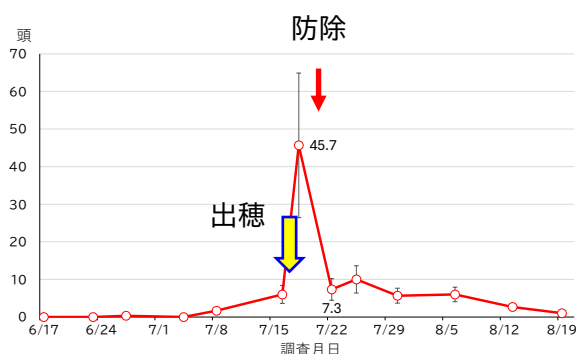


図1 早期栽培における発生消長（出穂7/17）



図2 普通期栽培における発生消長（出穂8/6）

※防除は図1:7/20、図2:8/10。但し図2は地域内全体として8/5・14の2回防除により発生量が少。

【雑草地での生態】

ノビエ類、メシバ、セイバンモロコシ、ホソムギの穂を好むことが確認されました。また、イネの出穂期が8月となる地域では7月にイネ科雑草の穂で普遍的に確認され(写真4・5)、一方、8月下旬以降は、イネの登熟進行に伴って再びイネ科雑草の穂で発生が確認されました(写真6)。イネカメムシはイネの穂に対する選好性が高いものの、イネ科雑草の穂も餌として利用することが明らかとなりました。

【予察灯における誘殺消長】

県内6か所に設置している水稻用予察灯(写真7)における半旬ごとの誘殺数の推移は図3のとおりです。2024年は7月上旬以降9月下旬にかけて誘殺が継続しましたが、2025年は7月の誘殺数が極めて多かったものの8月以降は極めて少なく、水田での発生が大きく減少したことが示されました。これは、7月から8月にかけて県内各地で取り組まれた広域的な防除の結果、発生量が大きく減少したことによるものと考えられ、この時期の防除が極めて重要であると言えます。

【2026年に向けて】

2025年は広域防除の効果によって2024年のような大規模な不稔被害はほとんど見られませんでした。しかし、2025年冬季における越冬状況調査では、好適な条件の場所で成虫の越冬が確認されています。2026年も2025年と同様に適確な防除を行うことが必要と考えられます。また、イネ科雑草の穂も餌資源となることから、適切な雑草管理も求められます。今後も、地域ぐるみで適確な防除に努めてください。



写真4 セイバンモロコシ
(2025/7/24)



写真5 ホソムギ(2025/7/7)



写真6 メシバ(2025/9/22)



写真7 水稻用予察灯

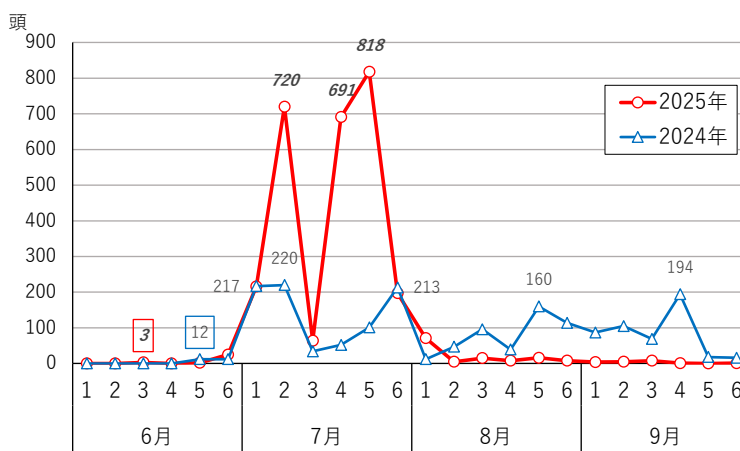


図3 水稻用予察灯における誘殺数の推移(6基合計)